

保育者養成課程における図画工作教育の題材開発 (1) ——子ども理解の観点から描画題材を構想する——

葉 山 登*

The Development of Teaching Subjects for Art Education (1) : In the Education Curriculum for Kindergarten and Nursery School teachers

Noboru HAYAMA

要 旨

保育者養成課程における描画題材の開発について述べる。2010年度前期の幼児教育学科図画工作1において、6回連続の描画を行った。その展開と結果を提示し分析を行う。一回目の描画では、学生たちがこれまでの図画工作・美術教育で学んだことを意識化するために植物を描いた。二回目から四回目は、大学における学びとして、子ども理解と重ね合わせて「六つのまるとプラス一つのまるを描く」「方向のある形を描く」「折り鶴を描く」などの描画を行った。五回目には再び大学の構内で育った植物を描き、六回目の授業において2枚の絵を比較検討し、レポートした。その結果、97%の学生が、自らの表現が向上したと認めることができた。

これらの描画は、上手に描くなどの技能向上という問題をひとまずアポケーして行った。子どもたちは何を必要としているのか、保育者の立場に立って絵を描くとすればどのようなのか、自己理解と子ども理解につながる表現とは、などの問いを掲げて、子ども理解につなげて描いたのである。それが、ヨーロッパルネサンスにはじまるアカデミックな一視点の描法から脱却させ、多視点的なとらえ方と生きた表現に向かわせ、表現を飛躍させてくれたと捉えられる。「対象が何を必要としているか」「何に向けての図画工作か、美術教育か」を考えることが、子ども理解につながる題材を構想させてくれたのである。ここから図画工作・美術教育再生の可能性が見えてくる。

キーワード：描画表現、子ども理解、心と身体を動かす、多視点、イメージ

*准教授 美術教育学・彫刻

1. はじめに

現代の教育課題は、「生きる力」を具現化する〔無藤 2008〕ことにあると言えるだろう。学習意欲の低下、自分への自信の欠如、自らの将来の不安などが上げられている〔文部科学省 2008〕。だからこそ、幼児教育者は、自己理解・自己と他者の関係性・自己と自然などとの関係性・個人と社会との関係性などの能力をエティックな視点からだけではなく、イーミックな視点からも身体化させて理解することが求められている。つまり、成長し続ける感性的な存在であることが求められているのである。

長田謙一は感性的存在について、理性・知性・感覚すべてをあわせ持つ活動的主体であるとしている〔長田 2009〕。これは、汐見稔幸のいう「全体的」にみたり「直感的」にみたり「イメージ」的にみたりする方法としての「感性による知」〔汐見 1996〕とも重なり合う。

先にあげた自己理解などの文言を身体化させて理解し、感性的存在であり続けるためには、幼児が主体的な活動を通して成長するように、幼児教育者もまた主体的な活動を通して自らの能力をひらき押し上げていく他はない。つまり、自他の存在を認める活動の実際を体験することが求められているのである。

幼児教育科や子ども教育科に学ぶ学生は、共通して子どもが好きであり、子供の世話が好きである。彼らの願いは、子どもたちの健やかな成長を支援したいということである。しかし、彼らもまた現代に生きており、現代の教育課題を共有している。何ものかに拘束されており、枠からはみ出ることを恐れているように見える。これは、様々な講義・演習科目を総合的につなぎ合わせて理解できない傾向と重なり合う。したがって、図画工作は造形活動のやり方を学ぶ科目であり、他の科目と関連している総合的な学びであるとは理解されにくい。また、自分は絵が下手だと自己評価して図画工作に対して苦手意識をもっているものも少なくない。しかし、このような自信欠如の原因は学生の能力にあるのではなく、彼らが自らの能力を規制しているところにある。図画工作において、自らがつくり出し囚われている自己規制の殻を打ち破り、自己の世界を広げ、自他の存在を認めることのできる活動の実際を提示したい。

2. 目的

本稿の目的は、描画の題材開発によって教育問題解決の糸口を探ることである。

そのために上手に描くなどの描画技能向上という問題をひとまずアポケーすることにした。そして、子どもたちの健やかな成長を支援する保育者になりたいという学生たちの気持ちに描

画活動を直接的に重ね合わせる描法を試みた。つまり、子どもたちが必要としている保育者の立場に立って絵を描くとすればどのようなようになるだろうか、自己理解と子ども理解につながる表現とはどんなのだろうかという問いを掲げて題材を展開したのである。

筆者が、これらの題材開発の基本に置いているのは、「心と身体を動かすために活動をする」ということである。からだが動くと自ずと感覚・感性の働きが引き出される。それと同時に心が動いてしまう。心が動いて思いが蓄積されると、全身から溢れ出るように表現が湧いてくる。内発性に裏付けられて、表現に喜びが伴ったとき、もはや上手下手という問題は意味をなさない。そして、表現がそれぞれの心の動きから生じた事態である限り、独自性に富み、個性的なことになってしまう。したがって、互いが異なることへの抵抗感をもつことなく、自他の表現を認め合うことが可能となる。つまり「心と身体を動かすこと」をキーワードとして、保育に置き換わる表現を目指し、横断的・総合的に学ぶ発想を培うことと自己規制の殻を破ることを目的とした。自らの成長を確認し、変わり得る存在であると自覚することが、先にあげた教育課題の解決に繋がると考えるからである。

3. 方法

2010年度前期においては、6回連続の描画課題を実施した。その展開と結果を提示し分析を行う。

4. 描画題材の展開と結果

(1) 2010年度前期のカリキュラム

2010年度前期において以下の題材を実施した。

- 第1回 なぜ図画工作を学ぶのかについて考える
- 第2回 共同制作 クレヨンのぬり重ねによる窓飾り
 - ・感性的存在であるために
- 第3回 水彩画 色と色の出会い
 - ・色彩の表情の変化を楽しむ
- 第4回 水彩画の額縁づくり
 - ・自分の表現の魅力を引き出し、認める
- 第5回 植物を描く1

- ・ 図画工作，美術で学んだことを活かして描く
- 第6回 六つのまるとプラス一つのまるを描く
 - ・ 心を動かし，生きた表現を体験する
- 第7回 方向のある形を描く - 動きを表す -
 - ・ 空間運動をイメージして描く
- 第8回 折り鶴を描く
 - ・ 理解するということを理解するために
- 第9回 植物を描く2
 - ・ 対象の中に入って，対象の動きを表す
- 第10回 レポート課題
 - ・ 植物を描いた2枚の絵を読む
- 第11回 平面を立体に変身させる
 - ・ 紙を折って切って曲げて立体構成する
 - ・ 飾って，身近な環境をつくる
- 第12回 ステンシル版画による共同制作
 - ・ 版画の技法を活用して色彩と形の変化や協働のたのしさを体験する
- 第13回 筐の花かごをつくる
 - ・ 身近な環境に目を向ける，身近な自然物を活かす
- 第14回 粘土で遊ぶ1 色粘土をつくる
 - ・ 粘土で色と色の出会いを楽しむ
- 第15回 粘土で遊ぶ2 色粘土による造形
 - ・ 可塑性について考える
 - ・ だれもが可塑的存在であり変わり得る

以上の通り，描画題材は，第5回から第10回までの6回連続で実施した。

第5回においては，これまでの図画工作・美術教育において学んだことを意識化することをねらいとして植物を描いた。第6回から8回は，筆者が目指している多視点的な考えに基づいて描画表現を行った。第9回には再び大学の構内にある植物を描いた。そして第10回の授業で2枚の絵を比較検討し，学生が自らの表現内容の変化を意識的に捉えることを求めた。

以下は描画題材の展開と結果である。

(2) 第5回 植物を描く 1 ・図画工作, 美術で学んだことを活かして描く

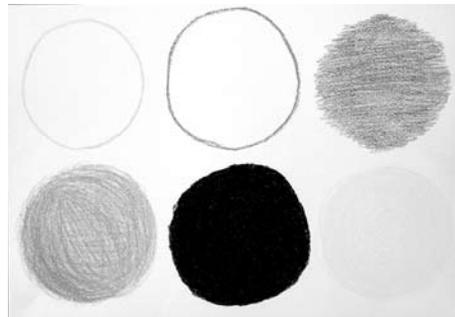
「これまでの図画工作・美術で学んだことを発揮してキャンパスにある植物を書きなさい」

この課題は、これまでの図画工作・美術教育において学んだことを意識化するために行い、以後の学びによって生じる変化の指標とする。

(3) 第6回 六つのまるとプラス一つのまるを描く ・心を動かし、生きた表現を体験する

この題材では、心を動かし生きた表現を体験することや、学生たちがイメージの性格によって表現の性格も変化することを実感できるように、以下の3つのねらいを提示した。

- その1 心を動かし、生きた表現を体験する
- その2 子ども理解につながる表現を目指す
- その3 想像力について考える



【題材の展開】

この展開の方法は、画用紙(8つ切り)を上下二段・3列の6等分をイメージし、以下のテーマを与え、左上から順次描くこととした。また、プラス一つのまるは、B5判の画用紙に描いた。

- i. 無条件でまるを描く。「まずまるを描こう」
- ii. 情景をイメージしてまるを描く。

「広い野原に子どもたちと輪になっているよ。小鳥がさえずる声が聞こえるよ。白や黄色の野の花が咲いているよ。子どもたちといっしょに歌を歌いながらまるい空間を動くような気持ちで描きます」

- iii. 平たいまるを描く。「平面を意識して、平たいまるを描いてみよう。平面という空間を動きます」
- iv. 次に立体的なまる、球体を描く。「前にもまるい、後ろにも斜めにも横にもまるいまるを描きます」
- v. 重く、固い立体のまるを描く。「球体の形を描くだけでなく、その内容をイメージします」
- vi. 生きているまるを描く。「赤ちゃんのように柔らかく、温かで、お乳のにおいもするような、生きている生命体としてのまるを描きます」
- vii. 鑑賞 互いが描いた六つのまるを鑑賞する。「まず自分が描いたまるを一步下がって距離を置いてみます。距離を置くと、目の前の空気の層が厚くなります。視野を広くするこ



とができ、画面全体を意識できます。つぎに、互いの作品を鑑賞します」

- viii. まるい空間に包まれている自己をイメージして描く。「対象を外側から見るのではなく、立場を換えて内側から見るとしたら、どんなことが起こるのでしょうか。自分の中に何が起こるかを意識して感じ取ってください」

【題材の結果】

この六つのまるを描くという題材においては、学生たちは、一様にイメージによって表現が変わり、学生それぞれの性格や興味関心によって、たくさんの表現が生まれてしまうことを実感している。その内容を学生たちのレポートをもとに以下のように整理した。

①イメージの内容によって表現が変わると気づいた

- ・固い、柔らかい、重い、暖かい、明るい・暗いなどのイメージによってさまざまな表現ができる
- ・イメージによって、自身の身体を硬くしたり、伸びやかにしたり、こころと体の動きに違いが生じる
- ・イメージは表面に見えている姿ばかりでなく、その背後に潜んでいる姿に思いをはせることであると感じた

②性格や興味関心によって、さまざまな表現が生まれる

- ・表現は自身の心の在り様やとらえ方や性格によってかわり、個性として現れてしまう
- ・いろいろなとらえ方や感じ方があり、一つの正答に向かっていない
- ・条件を提示されることで、どのように描きどのような色を選ぶことが適切かを探ることができる。それが自身の存在について考えることにつながる
- ・クレヨン色の選択もそれぞれであるが、固さを表現するときは共通した色を選んでいる

③活動が、つぎの活動を引き出してくれる

- ・表現してみることでイメージが湧いてくる、また、イメージすることによって手が動きやすくなり表現がスムーズに展開される

以上のことをほとんどの学生たちが共通して感じ取っている。

また、viiiプラス一つのまるでは、対象を内側から見ることに抵抗を感じた学生が少なくない。この考え方を新鮮に感じて積極的に取り組むことが出来た学生がいた反面、抵抗や戸惑いを感じ

じてしまった学生もいる。学校教育の多くは正答が用意されており、知識を学ぶことに偏っている。対象を外側から捉え、対象の立場に立って内側から捉えるという学びの経験が希薄であることが窺われる。しかし、このような見方は、幼児教育者としての資質向上という観点から重要であると言えるだろう。

(4) 第7回「方向のある形」—動きを表す—

この題材は、題材②viiiプラス一つのまるの経験をベースにしている。画面を十方に広がる空間と捉え、その空間を活動の主体となって動くことをイメージする。自身が画面の中に入って動く様子をイメージしながら、身体の空間運動として表現するように条件づける。

学生たちには、以下の三つを題材のねらいとして提示した。

- その1 自らが活動の主体となって動きの方向や性格を想像しながら描く
- その2 子ども理解につながる表現を目指す
- その3 表現する空間に性格を与えるために好きな色画用紙を選ぶ



【題材の展開】

i. 教室を画面の空間と見立て、動きを身体表現する。

筆者が実際に空間を動いてみせる。続いて学生たちも同様に、動きを表現する。

ii. 「動きを表す表現」をみて学ぶ。

・題材の紹介を学生参加で行う。

まず、学生たちに教卓の周りに集ってもらおう。ここからは、学生と筆者の協働で表現を進める。学生の一人に色画用紙を選んでもらう。色画用紙は、タント紙 (B4判) 100色を準備した。100色の色画用紙が並んでいると、それだけで嬉しくなってしまう。これは、選択決定の場面である。画材は、蜜蝋クレヨン 24色セットを用意した。このクレヨンは透明性があり、ぬり重ねると多様な色合いが生じて、微妙な表現ができる。別の学生にクレヨンの色を選んでもらう。つぎに動きを言葉で表現してもらおう。その動きを筆者が描く。さらに別の学生に、クレヨンと動きを指定してもらい描き加える。画面が、生きて展開されるように、これまでの表現を活かすことを条件に選択と提案をしてもらう。このように、学生と掛け合いでコミュニケーションを図りながら、題材の説明を行い、それぞれにイメージを広げてもらう。これは、

表現に自信を持っていない中学校特別支援学級の生徒との関わりの中で考えた方法である。クレヨンによる表現法をさまざまに提示することは、苦手意識をもっている学生に刺激を与え、表現活動に誘う出す方法として有効である。

iii. 学生一人ひとりが色画用紙を選ぶ。

100色ほど準備しておく、それぞれの心情にあった色を選ぶことができる。それが、表現への垣根を低くしてくれる。この選択決定もまた表現であり、選択した色画用紙によってその後の画面の展開は方向づけられる。

iv. 動きを表す

条件設定があり、具体的な表現法の提示があると、自ずとイメージが心に広がってしまう。「さあ、どうぞ、始めて下さい」と言うだけですぐに表現に向かうことができる。

v. 中間で鑑賞を行う

表現活動の中間に頃合いを見計らって、互いの表現を見合う。クラスの仲間のさまざまな表現が刺激となって、活動を活性化してくれるからである。

vi. さらに描き進める

筆者は、表現に対しての口出しを最小限にとどめる。しかし、教師の役割は、学生の存在を認めることである。求めに応じて、アドバイスをを行い、あるいは画面に何が表現されているかを読み取り、自分の意見として述べる。それが刺激となって学生の表現の高まりに繋がるからである。

vii. 鑑賞

互いの作品を鑑賞し、自らの作品を見直して、そこから読み取ったことをレポートする。

【展開の結果】

この「方向のある形を描く」-動きを表す-という題材においては、多くの学生が色画用紙やクレヨンの色を選ぶ楽しさを感じている。また、描きはじめるまでは、動きを表すという抽象的な題材設定に不安を感じているが、いざ描きはじめるとその不安が解消していくことが窺われる。活動することによって心が動き、表現意欲が引き出されるからである。イメージすることや描くという活動をはじめることが表現の垣根を低くしてくれることが窺われる。さらには、鑑賞を通してクラスの仲間からの刺激も大きいことが分かる。互いが違う表現をしていることに気づくところから他者理解がはじまっていると捉えられる。また、そこから新しい発想が生まれると感じている。もう一つ重要なことは、学生が子ども理解と描画を重ね合わせて考えはじめていることである。前回のイメージによって表現が変わると感じたことの身体化がはじまっていると捉えられる。しかし、難しさを解消できず、戸惑う学生も見受けられた。

学生たちのレポートを以下のように整理した。

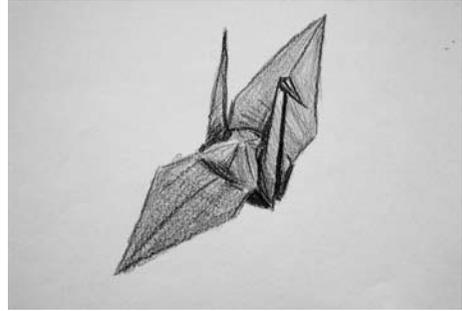
- ①色画用紙やクレヨンなど色を選ぶことは楽しい
 - ・白い画用紙ではなく色画用紙に描くと雰囲気さがらりと変わり、刺激になる
 - ・100色の選択肢があり、その中から選ぶことができるので気持ちにぴったりの画用紙を選ぶことができ楽しくワクワクする
 - ・選ぶ色画用紙によって画面に雰囲気が生まれる
 - ・画用紙を選ぶだけでイメージが湧いてくる、選ぶことの楽しさを感じる
 - ・好きな色の画用紙に描いていると気分がいい、イメージがパァ〜と浮かんでストレートに表現できる、すごくやる気が出る
 - ・自分の好きな色画用紙を選ぶことで気持ちに負担が掛からない
 - ・色画用紙の色やクレヨンの色など色がいっぱいあると緊張がほぐれる気がする、好きな色をたくさん使って描くのはなかなか楽しい
 - ・色画用紙によって映える色がありすごくきれいと感じることができる
- ②イメージによって表現が変わることを改めて感じるようになった
 - ・イメージの内容によって表現の性格が変わり、前回の授業との繋がりを感ずることができるようになる
 - ・何気なく描いても、そこに自分の無意識なイメージが広がっているように感じる
 - ・題材の紹介で描く様子を見ていると、描きたいもののイメージが見えてきた
 - ・イメージして描くと、上手下手に囚われず表現でき、絵は嫌いという思いが薄れる
- ③動きが表現を引き出してくれる
 - ・動きを表すという抽象的な題材設定に不安を感じるが、いざ描きはじめるとその不安が解消していく。描きはじめると、いろいろなアイデアが浮かんで、自由さを感じて描くことができる
 - ・動きをイメージして表すと自分の心も動いていると感じる、また自分が動くことでイメージが湧いてくる
 - ・動きを表すということだけが条件だったので、自由に楽しく描くことができた。動きを表すという発想を新鮮に感じた
 - ・クレヨンの動かし方によって表現内容が変わってくる
 - ・動きを表す表現は簡単なようで難しい、手を動かしているとイメージが湧いてくるから面白い
- ④自分や友達の作品を鑑賞すると、新しい発想が生まれたり、自分について気づかされることが多い

- ・ 仲間の作品を鑑賞することでそれが刺激になって新しいイメージが湧いてくる、仲間の表現に助けられ学ぶことができる、さまざまな表現があることに気づかされる
 - ・ 仲間の表現と比較してみると自分の性格・個性に気づかされる、ひとり一人が自己実現していくことの大切さを思う、ひとり一人感性が違い、違う表現をしているからこそ楽しい
 - ・ 互いの表現に共通性があることにも驚かされる
 - ・ 前回の授業との関連で友達の作品を見ると、何をイメージしているか見えるような気がする。その人のイメージしたことが見えてきて、なるほどと思う
 - ・ 鑑賞することで、自分にないものをどんどん吸収でき、表現を高めることができる
 - ・ 素直に表現すると自分自身の気持ちに気づくことができる
 - ・ 自分の世界を表現することは楽しい、自分がどのようなことを考えているかに気づかされる
- ⑤動きと動きの関係性に関心を寄せると空間を表現できる
- ・ 色彩や動きの性格や方向などの関連性に関心を寄せて描いていると一つの働きかけで画面の印象が全く変わってしまう。画面の変化や距離感を感じることができる
 - ・ 絵を描くときに、方向や性格なんて考えたことがなかったが、意識して描くことで絵が変わったように見える、上手下手から解放されて集中できる
 - ・ 空間は前と後ろ、左右上下があり複雑であるが、興味を感じる
- ⑥子ども理解と描画を関係づけて考えるようになった
- ・ イメージして描こうとすることが子どもたちの刺激になって、想像力を育むことにつながると思う
 - ・ 気持ちの持ち方で表現が変わり、この変化は子どもの心理を理解することにもつながっていると感じる
 - ・ 表現はいろいろなことを総合していくことだと考えると、難しく感じる。自分の表現が子どもたちに理解されるかどうか不安に思う
 - ・ 「幼稚園の休み時間」に子どもといっしょに絵を描いている様子が浮かんでのびのび表現できる
- ⑦絵はやはり難しい
- ・ 何を描きたいのか分からなくなってしまう、上手下手の価値観にこだわっている自分を感じる

(5) 第8回「折り鶴を描く」 ・理解するということを理解するために―

これは、「理解するということを理解するために」という副題をつけて行い、「理解するとは、

具体的にどうということ？」と尋ねることからはじめた。折り鶴を手にとってさまざまな角度から見ると対象の姿が変わって見える。動くことによって隠れていたところが見え、見えていたところが隠れる。対象に近づくと部分を詳しく見ることができ、離して見ると俯瞰できる。多視点から見ることによって、より多くの情報を得ることができることは明らかである。これは、幼児や児童がなぜ多視点の絵を描くのかを理解することにつながると考えられる。



また、対象を外側から見るだけでなく、その成り立ちを検証することでも理解は深まる。鶴を折り、それを展開してみる方法で、成り立ちを考えるきっかけを提供した。また、紙を折ると面と面の方向性の違いが生じて、折り線ができる。折り線どうしが、どのように関係し合っているのか、その関係性にも注意を向けた。つまり、隠れて見えない所も想像することや成り立ちを想像すること、さらには関係性に関心を寄せるように働きかけたのである。それらはイメージに量を与えると同時に、構造的に捉えることにも繋がる。そして、これらを総合化することが理解を深めることであると考えた。

「幼児教育科の学生のみなさんは、子どもが好きであり子どもを理解したいと願っています。この子ども理解に向かう姿勢をそのまま描画に置き換えたらどうだろうか。保育室に入ってきた子どもの表情にかげりを感じたとします。なぜだろうと思い子どもの所へ足を運ぶでしょう。そして、しゃがんで目の高さを同じくして「おはよう」と声をかけて様子を窺うと思います。さらにどうしたのかなと尋ねてかげりの表情がどこから生じているかを推し量るでしょう。このような保育者の日常の姿を描画表現に重ねるとしたら、どのような絵を描けるのだろうか、上手下手を乗り越えた魅力的な絵を描くことができるのではないだろうか、保育と描画が一体となった表現ができるのではないだろうか」と問題を投げかけるのである。学生たちは、描画を身近な問題としてイメージできたとき自由さを感じ、自主性を発揮して課題に取り組むことができる。

そこで、この題材のねらいを以下のように設定した。

- その1 保育者の目で描く
- その2 形の成り立ち・関係性を考える
- その3 心を動かし、多視点から見て描く

【題材の展開】

折り紙・100色のタント紙とシリウス画用紙・蜜蝋クレヨンを準備し、「動きを表す」題材と同様に学生と掛け合いをしながら、まず筆者が鶴を描いた。

i. 「折り鶴を描く」を見て学ぶ

例によって教卓の周りに集まる。学生がお気に入りの色紙を選ぶ。筆者が鶴を折る。副題「理解することを理解する」についてどのように考えるかを学生に問う。筆者が折り鶴を机の上に置き、近寄ったり、離れたり、角度を変えたり、具体的に空間を移動して視線の位置を変えて見る。また、つるを手を持って下から見たり、上からや斜めから見る。さらに、予めつくっておいた鶴の折り線上にマジックで線を描き入れる。そして関係性を意識できるように、折り鶴を解いて展開してみせる。

つぎに色画用紙を学生が選び、クレヨンの色も選ぶ。描きはじめは、まずプランの設定である。折り鶴のどの部分が机に接しているかを尋ねる。さらには、デッサンの要が何処にあるかを尋ねる。折り鶴を裏返した穴の部分に注意を向ける。展開した折り紙を見ると、この穴の部分がさまざまな箇所には散らばっていることが分かる。それらが折ることによって、穴にあたる一点に集中する。しかも首と尾、両方の翼はこの穴を基点としていることが分かる。そして、プランと基点を意識すると、関係性は自ずと理解されてくる。「七つのまる」「動きを表す」の中で提示した表現法を意識しながら、これまでの学びを思い出すことができるように描く。また、それぞれの学びのテンポで理解できるように、言葉での説明は最小限にとどめる。

ii. 鶴を折る

25色の色紙からお気に入りを選ぶ。選択肢があると、自由さを感じることができる。この選択も自己の存在を意識させてくれる。

iii. 折った鶴が輝いて見える色画用紙を選ぶ

これも色紙の選択と同様に自己の存在を意識させてくれる。選んだ色紙と色画用紙との関係性が、すでに描き手の興味関心や性格を表しており、表現しやすい環境設定となる。

iv. それぞれのテンポで描く

描きはじめたら、静かに見守る。

v. 中間に鑑賞会を行う

互いの表現を鑑賞し合う時間を設ける。これによって、新たな刺激を得ることができ、表現活動を活性化させることができる。

vi. さらに描き加える

vii. 鑑賞

互いの作品を鑑賞し、自らの作品を見直して、そこから読み取ったことをレポートする。

【展開の結果】

学生たちは、静かさが広がる中で、とても集中して描くことができた。描画表現の目的を上手に描くことではなく、教育現場で求められる子どもを理解に重ね合わせたことが、学生たちに手がかり与えたと捉えられる。彼らは、構造や関係性に関心を寄せると自ずと空間が生じ立体的に描けることに気づく。そして、隠れて見えない所を想像したり、視点を動かして確かめたり、多視点から観察することの重要性に気づいていった。さらには、この折り鶴の描画においても鑑賞することによって、自己と他者との違いを意識し、それを刺激として表現に活かすことができた。

学生たちのレポートを以下のように整理した。

①構造や関係性に関心を寄せることで、立体的に描ける喜びを味わうことができた

- ・中心を考えて描くと全体を把握しやすく立体的に描ける
- ・構造や関係性を意識しながら描くと自然に鶴が立体的に描けていた
- ・どのように折られているか、何処と関係しているかを見ると、立体としてイメージをもちやすい
- ・これまで立体的に描くことができなかつたが、描き終えてみると立体的になっていて感動した
- ・一枚の紙が立体になることの不思議さを改めて感じた
- ・折り目や角度を意識することで立体的に描くことができた
- ・構造や線をつなげるだけでこんなにも描いた鶴が立体的に変化するのかと思うと楽しかった
- ・鶴が机に接している4点を考えると、鶴の大きさが決まってしまうことに気づいた
- ・「まるく感じたところはまるく描こう」という言葉を思い出して描いたら、立体的になっていた
- ・心と体を動かす表現を活かすことにより、まるみや距離感が出て、立体的に描くことができた
- ・線と線の関係性を見ていくと、偽物の鶴ではなく、本当の鶴の姿形に変わってきた
- ・中心の穴の所に印をつけて展開すると色紙のいろいろなところに広がっていることに驚き、面白いと感じた
- ・鶴を2つ折り、立体と展開したものを比べてみると関係がよく分かる
- ・一度折った鶴を開くという経験はなかつたので、とても楽しく、折れ線の関係性をイメージできた

②想像力を働かせたり、形の成り立ちなどを考えると集中することができる

- ・構造や関係性を考えて描くのは難しいが、考えたり、想像して描いているととても集中できる
- ・描くためにたくさんのことを意識したのははじめての経験。新鮮な気持ちで描くことができた
- ・形の成り立ちなど、普段考えないことを考えさせられた
- ・形の関係や繋がりを見ることで考える力がつくと感じた
- ・隠れて見えない所を想像するとリアルになると感じた。奥が深いなあ！
- ・いろいろな方向から見て、羽が伸びている方向など想像力を働かせると、難しさを意識しなくなった
- ・難しかったけれど、想像力や考える力が身につくと思った
- ・分かろうとして描くと、だんだんに関係が見えてくる。想像して描くことが楽しくなってきた
- ・難しく苦戦したが、これまでの授業をもとにイメージして描くと自然に描けた
- ・羽の部分に触るような気持ちで丸みをつけて描くと、今にも飛び立つように感じた
- ・伸びやかさとダイナミックさを意識して描いたら、今までにない作品になった

③観察力は子ども理解につながり、保育力と繋がると感じた

- ・絵の善し悪しは技術も少しはあるけど、どれだけ観察しているかが大きな鍵になる。これは保育と重なると思う
- ・上手に描こうとしてきたことと対象を理解しようと考えて描くのでは感覚が全く違っていた
- ・子どもと接するときも隠れた部分を深く知ろうとして交流を深めるようにしていきたい
- ・どのような成り立ちか、どことつながっているかなど、考えれば考えるほど鶴の形を表すことにつながった。子どもの理解も同じように考えられるのではないか
- ・じっくりと見ていると微妙な変化や隠れている部分を想像することができると感じた
- ・さまざまな視点から見て描くということを新鮮に感じた、いろんな角度から見るのが子ども理解につながると思った
- ・一見何の関係もないように見えるデッサンと保育が、理解するということにつながっていると感じた
- ・これまで学んできたことをフル活動させることの大切さ、すべてが繋がっていると感じた
- ・部分をよく見ることと広く周りを見る必要があると感じた
- ・視野を広げていかないと、自分の考えや行動が一方通行になってしまうのだなと思った

- ④他者の作品を見ることで、ヒントを得たり、互いの違いを感じることができた
- ・他の人の絵を見ることによって、自分の絵のヒントになることがある
 - ・それぞれ選ぶ色や描き方が違って個性が出ていたと思う
 - ・色紙や画用紙の色が違う、それぞれが折った鶴を描き、角度も大きさも違う。ひとそれぞれなのだと思う
- ⑤活動しながら考えた方が、ものごとは進んでいくように感じる
- ・考えようとじっとしているよりは、描きながら考えた方が進んでいくように感じる
 - ・どこから描いたらよいか戸惑ったが、描いている内に自然と自分の世界に入ることができた
 - ・不安だったが、色を足したり、影をつけているうちにそれらしくなっていった
 - ・絶対に立体的に描けないと思っていたが、折り線の方向などをよく見ようと描きはじめたら、立体的になっていた
- ⑥やはり、難しいし戸惑いを感じてしまう
- ・どこを中心に考えると良いのかよく分からなかった
 - ・考えることがいっぱいあって戸惑い、難しかった
 - ・苦手なものにとっては、どこから描いたらよいか分からず、やはり難しかった
 - ・難しかったが、分かって分かってとすると、だんだんに理解できた

(6) 第9回「植物を描く2」 ・対象の中に入って、対象の動きを表す

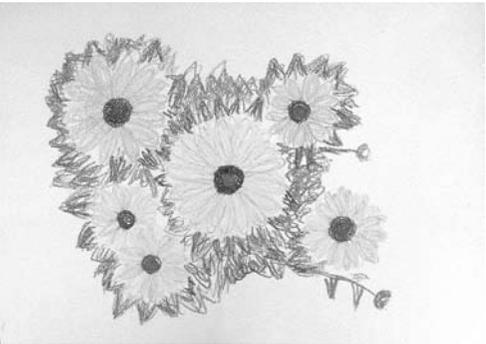
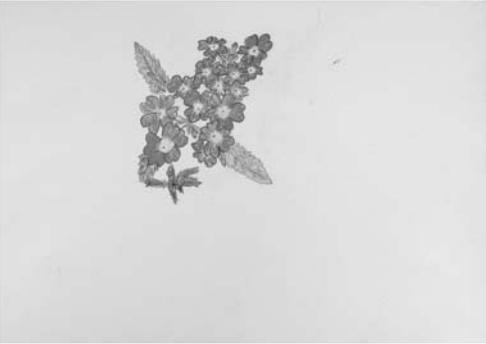
ここでは、描く対象の中に意識を入れて、対象の動きに添って表す。また、これまでの描画体験で学んだことを活かして総合化して描くことをねらいとした。

この日は雨が降っており、外で植物を描くことができなかった。そこで、構内にある植物を切り花にして描くことにした。花瓶に生けた花を描くことで、対象により接近でき、多視点から見て描くことが容易になったようだ。学生たちの意識の運動もダイナミックになり、しかも静かな雰囲気の中で集中して描くことができた。筆者は、ほとんど声を発することなく、ただ見守るだけであった。

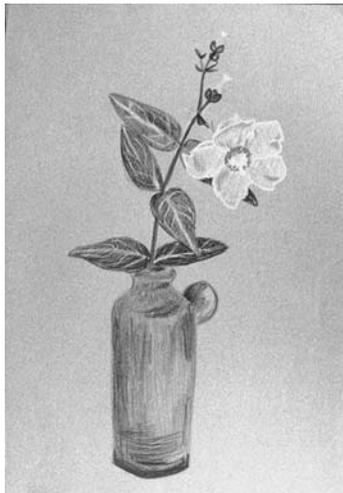
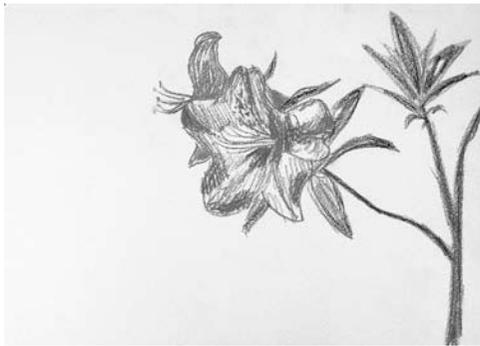
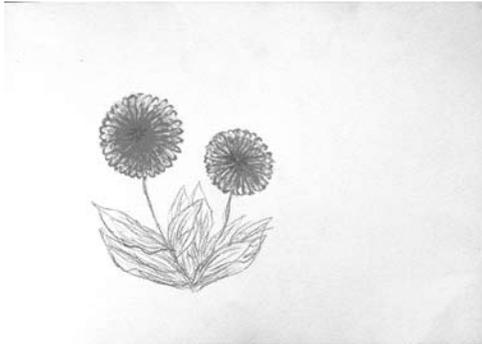
(7) 第10回 レポート課題 ・植物を描いた2枚の絵を読み、比較検討する

「植物を描く1」と「植物を描く2」の二つに課題を行った学生は、82名である。学生たちは、以下に示した写真のように自分が描いた2枚の絵を並べて検討し、レポートした。写真の左が「植物を描く1」の作品であり、右が「植物を描く2」作品である。(左右は同一の作者である)

葉 山 登



保育者養成課程における図画工作教育の題材開発 (1)



【レポート課題と結果】

レポートは、以下の設問1～4に対して答える形式で行った。1は記号で答え、2～4は記述式である。その内容を以下の通りに整理した。なお、2～4については、例えば【表現が具体的になった】57名であるが、細目の合計は73名であり、数が一致していない。これは、重複した記述の場合に、どちらもカウントしているからである。まず、1. についての結果を述べ、つぎに2～4について、肯定的な変化を認めたもの、否定的な変化を認めたもの、変化がなかったとしたものの順に述べる。

2回植物の絵を描いた。2枚の絵を比較して以下のことに答えなさい。

1. あなたの絵に変化はありましたか。

変化があった 81名（肯定的な変化80名・否定的な変化1名）

変化がなかった 1名

【肯定的な変化を認めたものについて2.～4.を以下に整理した】

2. あなたの絵はどのように変化しましたか。

①【表現が具体的になった】57名

- ・一回目は大雑把であったが、二回目は細かに観察して描くようになり、一つ一つじっくりとていねいに繊細に描いている 42名
- ・あやふやさや曖昧さが無くなり、雰囲気だけではなくなった。はっきりとした表現になった 11名
- ・具体的に表現できるようになり、花や葉などそれぞれの違いを描き分けられるようになった。 7名
- ・細かな変化に関心が向かい、特徴や個性を描き分けようとしている 6名
- ・花や葉の向きや重なりに注意を向けるようになった 4名
- ・イメージを固定化させずに、思い込みではなく、見て描くようになった 3名

②【立体的・空間的な表現に向かっている】33名

- ・平面的ではなく、立体的になっている 23名
- ・形の大きさ・角度・奥行き・空間に関心を持つようになった 11名

③【表現に動きや表情が出てきた】16名

- ・画面に動きが出てきた 7名
- ・性格を考えて描くようになり、柔らかさや堅さが出てきた 4名
- ・絵に表情が出てきて、生きた瑞々しい表現になってきた 5名

④【色彩の変化や色遣いに関心を寄せるようになった】36名

- ・色の微妙な変化に気づくようになった 18名
- ・使う色数が増えた 8名
- ・ぬり重ねなど、色の表現の幅が広がった 6名
- ・色の考え方や使い方が柔軟になった 4名
- ・色遣いに関心を寄せるようになった 3名

保育者養成課程における図画工作教育の題材開発 (1)

- ⑤【関係性や全体性を考えるようになった】26名
- ・葉と茎の繋がりや葉と花の関係など関係性に関心を寄せるようになった 14名
 - ・視野を広くして、全体性を考えて描くようになった 10名
 - ・描く対象や画面の構造を考えるようになった 4名
 - ・バランスのよい表現ができるようになった 2名
- ⑥【見えていないところも想像するようになった】9名
- ・実際には見ることのできないところを想像するようになった 9名

3. その変化はなぜ生じたと考えますか。

- ①【一回目の絵は、視点を一カ所に定めて遠くから見ていたが、多視点から対象を理解しようとした】60名
- ・遠目や外側から眺めるようではなく、対象をよく観察して、具体的にいていねいに描こうとした 43名
 - ・さまざまな視点・角度から対象を見て描こうとした 12名
 - ・形の動き・方向性（流れ）・奥行きを理解したり、考えて描いた 12名
 - ・空間や立体を意識して描いた 7名
 - ・色彩の変化を細かに観察しようとした、使う色数も多くした 12名
 - ・描こうとすることより対象を理解することに力を入れた 5名
 - ・よく観察すると発見が多く理解が進み、描く楽しさを感じた 6名
 - ・隠れて見えていないところも見えて繋がりや構造を考えて描いた 12名
- ②【感じて、イメージをもって描こうとした】18名
- ・上手下手ではなく、花や葉の動きや流れ、柔らかさ、表情などを感じて描こうとした 10名
 - ・線の性格や方向を感じたり、考えて描こうとした 5名
 - ・見えていないところも想像して描いた。対象の内側から見ようとした。思い込みで描かなくなった 4名
 - ・植物の手触りなども感じて描こうとした 1名
 - ・大きく描こうとした 3名
- ③【描く取り組みの姿勢・態度・気持ちが変わった】27名
- ・上手に描こうではなく、対象を理解しようという姿勢が変わった 9名
 - ・あるがまま描こうとして、対象と向き合うことができた 11名

- ・思い込みでなく、素直に描こうとした 6名
- ・意欲が変わり、達成感が高まった、真剣に、気合いを入れて集中して描くことができた 8名
- ・なぜ、どうしてと意識して捉えるようになった 1名
- ④【これまでの授業で学んだことが活かされた】24名
 - ・7つのまるや動きを表す課題を体験して、イメージして表現しやすくなった 8名
 - イメージによって表現が変わることを理解した 3名
 - ・7つのまるなどの経験で、技術としてではなく、理解するという考え方で描くと表現の手がかりを得ることができた 4名
 - ・想像力と観察を重ね合わせると、スムーズに表現できるようになった 2名
 - ・立体的な表現や空間的な表現を活かすことができた 2名
 - ・クレヨンや色鉛筆などの使い方やいつの間にか学んでいて活かせるようになっていた 3名
- 4. これまでの描画（7つのまる・方向のある形・つるを描く・植物を描くなど）で、あなたは何を学びましたか。
 - ①【イメージや意識など心の動きによって表現が変わることを学んだ】68名
 - ・柔らかい、重い、やさしいなどのイメージによって表現が違うこと 52名
 - ・何を表現するかを意識すること 27名
 - ・線と線、形と形や動きと動きの関係性や構造や構成を考えること 35名
 - ・対象が成長する姿や生命感を意識すること 7名
 - ・色と色の重なりによって、色彩を感じ、多様な色彩表現ができること 18名
 - ・材料や描く場所などの条件で表現が違ってくる 5名
 - ②【理解するということを学んだ】40名
 - ・理解することに視点を置くと描きやすくなる、その大切さを感じる 15名
 - ・理解するとは、イメージを深めることであり、観察力を働かせることだと思った 20名
 - ・表面的ではなく、隠れて見えていないところもイメージして本質を見ようとすることであり、いろいろな立場・視点に立って見るのが大切ある 21名
 - ・技術も大切であるがそれ以上に理解して描くことや興味関心を持つことが大切だと気がついた 13名
 - ③【自分と他者を知ることの大切さを学んだ】20名
 - ・クラスの仲間の作品を見ると感じ方や考え方の違いがあり、発見が多い。そして

保育者養成課程における図画工作教育の題材開発 (1)

自分を意識する	14名
・さまざまな描画表現を通して、自分の心の動きを見ること	8名
④【成長していると感じ、さまざまな気づきがあった】48名	
・絵を描くことが嫌でなく、好きになった。取り組みの姿勢が変わった	8名
・観察力や表現力が向上したと感じる。素直に表現できるようになった。自分自身の成長を感じる。見方やとらえ方が変わってきた	40名
・対象と向き合うことや対象の立場に立って内側から見ることの大切さに気がついた	7名
・真剣だけれど、楽しいことがあると知った。達成感があった。集中力を発揮できた	5名
・上手下手ではなく、自分を高めることが大切だと気がついた	7名
・一つの題材がつぎの題材の準備になっており、関連性をもっている。題材の一つ一つが意味をもっている	4名
⑤【対象への理解は保育とのつながっていると感じた】40名	
・描画表現と保育が対象理解というところで繋がっていると感じた。理解を深めることの大切さを感じた	11名
・うわべだけでなく、想像力を働かせ、子どもの思いをしっかりと捉えるところは同じである。理解しよう、相手の立場に立って見ようとするのが理解に繋がる。観察力は、子ども一人ひとりをよく見ることに繋がる	35名
・気持ちの持ち方で表現内容が変わってしまうところは保育と共通している	4名
・たのしく学ぶことが大切である	2名
・描画も保育も自分の心を育てることが大切である	1名

【否定的な変化を認めたもの（1名）について】



2. あなたの絵はどのように変化しましたか

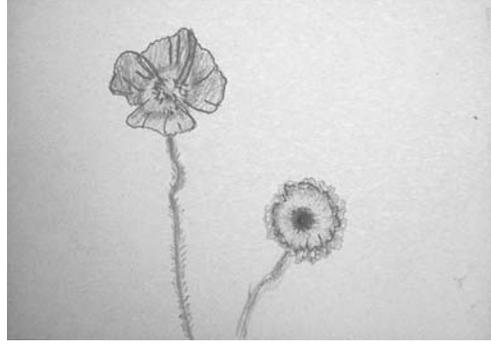
- ・1枚目は自然に描けていた
- ・2枚目はコチコチしていて固い
- ・2枚目は葉脈などがちゃんと描かれているところが進歩している

3. その変化はなぜ生じたと考えますか

- ・外で風が音を感じながら自然に触れて描くことができた
- ・教室の中では、自由さを感じることはできなかった

以上のように述べている。この学生の場合、対象の中に入って内側から見るということができなかったと見ることができる。それがコチコチという表現になっていると捉えられる。

【変化がなかったとしたもの (1名)】



この学生は、以下の内容をレポートをしている。

- ・正直自分の絵に変化があったか分からなかった
- ・全然上手に描けないので嫌だった
- ・いろいろな視点から見て、対象を理解して描こうとした。これは幼児教育にも必要なことだと思う。決めつける見方ではいけないと思う

筆者の目には、明らかに2枚目の方が進歩しているように見える。しかし、本人はそれを認めることができなかった。その原因は、画用紙の裏に描いたことに因ると考えられる。裏に描くと表現が画面の中に吸収されてエネルギーを発しない。その消極性に反応したと捉えられる。

5. 考察

以上の題材の展開した結果、97%の学生が、自らの表現が向上したと認めることができた。

最初に、幼児教育者は、自己理解・自己と他者の関係性の理解などの能力をエティックな視点からだけではなく、イーミックな視点からも身体化させて理解することが求められていると述べた。そして、描画技術向上という問題をアポケーして描画題材を展開した。「心と身体を動かす」をキーワードとして、幼児教育者を目指す学生たちが最も関心を寄せている子ども理解の視点を描画に重ね合わせた。このことから対象への理解は保育につながっていると感じた(40名)、理解するということを学んだ(40名)とする学生も少なくない。

幼児教育者に求められる子ども理解の観点を描画表現における対象理解に重ね合わせたとき

に、画面に空間が生じ、集中力が発揮され、表現力の飛躍が生まれ、充実感や達成感を得ることができたのである。描画が、図画工作の上手に描くという問題から離れ、子どもの健やかな成長に与るという幼児教育の目的に直接に結びつこうとすると、意欲が高まり、自己の存在を認めることに繋がると示唆される。これは、自分が成長していると感じ、さまざまな気づきがあった（45名）からも窺うことができる。

さらにこれらの題材の展開は、考えることから始めたのではなく、空間を動くことから始めている。実際に身体を動いてみたり、イメージによる空間運動を行うと、学生たちは活動の中で感覚を使い、動いている私を感じ、次々にイメージを膨らませて、新しい発想を生み出していることに気づく。活動することがきっかけとなって、心を動かしていることが示唆される。そして、表現が具体的になった（57名）、イメージや意識など心の動きによって表現が変わることを学んだ（68名）などの結果を得ることができた。上手下手ではなく、描く対象から感じてイメージを膨らませるなど心を動かすことによって、具体的な表現になることが示唆される。

また、一視点から多視点への発想の転換も大きいと考えられる。学生たちが描いた一枚目の絵は、明らかにヨーロッパルネサンスにはじまるアカデミックな一視点の描法を示している〔鬼丸1997〕。遠くから、視点を静止させて主に全体視を目指していることが分かる。2枚目の絵は、その描法をひとまず棚上げにして、子ども理解につながる表現を目指した。理解を深めようとするとき自ずとさまざまな角度から見ざるを得ない。結果として、幼児や児童が行うように多視点的なとらえ方をしていた。これは、筆者の造形観からの提案であったが、学生たちは、水を得た魚のように生き生きと絵を描き達成感をもつことができた。そして、興味深いことは、部分的な見方を大切にしながら、関係性を意識することによって、全体的な表現になっていることである。多視点から対象を捉えることによって、立体的・空間的な表現が生じていることが分かる。多視点から捉えるとは、対象の外側をさまざまな方向から見ることばかりでない。その内側に入ってみることを含み、ものごとの成り立ちのプロセスをイメージすることも含む。1回目の絵は視点を一カ所に定めて遠くから見ていたが、多視点から対象を理解しようとした（60名）などの結果を得ることができた。

以上のように、わずか数週間という短い期間の中で、学生たちの描画表現に大きな変化がもたらされた。「心と身体を動かすこと」をキーワードとして、対象理解を保育に重ね合わせることによって、横断的・総合的に学ぶ発想を培い、自己規制の殻を破ることができるのである。子ども理解の観点からの題材構想は、「何に向けての図画工作か、美術教育か」〔柴田2009〕、また「対象は何を必要としているか」を考えることによっている。ここに図画工作・美術教育

の再生の糸口が見えていると言い得るだろう。この視点は、同時に保育者の資質向上にも繋がっていると考えられる。

引用・参考文献

- 荻宿俊文, 2009, 「ワークショップデザイナーとは何か」, 武蔵野美術大学造形ファシリテーション能力プログラム 2009 年度報告書
- 文部科学省, 2008, 小学校学習指導要領解説図画工作編
- 無藤隆, 2008, 「新しい時代の幼稚園, 小学校教育に求められるもの」, 『初等教育資料』, 平成 20 年 4 月号
- 長田謙一, 2009, 「〈美術／教育〉の扉をひらく」, 『美育文化』, Vol.59 no.1
- 鬼丸吉弘, 1997, 「子どもの絵をめぐる世間の誤解を解く」, 『美育文化』, Vol.47 no.6
- 柴田和豊, 2009, 「共通事項をどう考えるか」, 『造形ジャーナル 2009』, Vol.54 no.4
- 汐見稔幸, 1996, 「かしこさってなあに一乳幼児期の知育を育てる」, IUP・移動大学出版会